



LYNX

『LYNX』

〔登場人物〕

- オガワオサム
- エンドウユキオ
- ウサミハルタ
- イタバシフミオ
- アマリシユンジ

(text)

「ニューロマンサー」／ウイリアム・ギブスン（黒丸尚・訳）／ハヤカワ文庫SF
「暗闇のスキヤナー」／フィリップ・K・ディック（飯田隆昭・訳）／サンリオSF文庫（絶版）

#プロローグ

完全円形舞台。

客席ドアから舞台へ繋がるハッセージが2本。

ハッセージはそれぞれ、オガワの部屋の奥へ繋がるものをA、外部へ繋がるものをBと呼ぶ。

舞台面は、黒い鏡のように辺りを反射している。

天井から、チェーンが幾筋か舞台の縁上に降りていて、柱のようにも檻の鉄柵のようにも見える。

舞台上には、2カ所突起している部分があり、その上にそれぞれ、テレビと電話が置かれている。

客入れの音楽が大きくなる。

暗転。

音楽が消える。

暗闇にオガワの声が聞こえてくる。

オガワ

（録音）はい、オガワです。ただいま留守にしております。ご用の方は、発信音のあとにメッセージをお入れください。

音楽。（「Washing Brain Machine」／清水靖晃）

舞台の中央に、エンドウユキオが立っている。

ハッセージAから、ガスマスクをつけ、殺虫剤の大型ボンベを背負ったオガワオサムが現れる。

オガワ、舞台上に殺虫剤を散布している。

しばらくして、エンドウの存在に気づくと、マスクを外して近寄る。

対峙するオガワとエンドウ。

エンドウの左手が動く。

反射的にオガワの右手が同じように動く。

一瞬オガワは戸惑うが、すぐに二人は鏡に向かい合ったように同じ動きをし、お互いの手を合わせる。

その瞬間、エンドウがオガワの側に顔をつきだし、二人の額が触れ合う。暗転。

音楽が消え、照明がつく。

舞台中央にオガワが立っている。

エンドウの姿はない。

かわりに、アマリが舞台上で咳き込んでいる。

また、テレビのあった位置にウサミ、電話のあった位置にイタバシがすわっている。オガワ、アマリに気づく。

オガワ　アマリさん……

アマリ　何やってたんだ？

オガワ　え？

アマリ　なんだこの臭い？

オガワ　殺虫剤ですよ。

アマリ　殺虫剤……

オガワ　ええ。わけのわかんない虫が大量発生してまいつてるんですよ。

アマリ　虫なんか全然いないぞ。

オガワ　今は隠れてるんですよ。でも、夜になると出てくるんです。もう3日もロクに寝てない。

アマリ　そりゃ大変だな。

オガワ　そのうち殺されちゃいますよ。

アマリ　刺したりするの？

オガワ　ええ、今だって髪の毛の中や肺にもいるんです。うっ！

アマリ　どうした？

オガワ　また頭のヤツが刺しやがった。

アマリ　痛いのか？

オガワ　痛いなんてもんじゃありませんよ。うっ……

アマリ　大丈夫か？病院とか専門家に診てもらったらどうだ？

オガワ　そうするつもりです。分析してもらおうと思っ、たくさん捕まえてはあるんです。

オガワ　ほら、見てください。

オガワ、ウサミのすわっている脇に置かれている透明ビンを持ってきて見せる。

ビンの中には綿ボコリや髪の毛などのハウスダストが入っている。

オガワ ね、いったい何ていう虫ですかね？

アマリ ……オガワくん。

オガワ 何です？

アマリ これ、ハウスタストじゃないの？

オガワ 何言ってるんですか？ほら、動いてるでしょ。虫なんですよ。こいつらが刺すんです。

アマリ ……

オガワ それに、夜になるとジージー、ジージー鳴くんです。

アマリ へえ。

オガワ アマリさんにはわからないんですよ、この虫の怖ろしさが。

アマリ いや、よくわかるよ。

オガワ 本当ですか？

アマリ ああ。

オガワ ほんと？

アマリ だから殺虫剤撒いたんだろ？

オガワ そうです。

アマリ だけど、殺虫剤撒いた部屋で寝るのは体に良くないだろ。

オガワ そんなこと言ったって、殺虫剤撒かないと痛いし、うるさいし、寝られないんですよ。

アマリ そうか…ま、気をつけることだな。

オガワ ありがとうございます。

アマリ で、今日は何の用なんだ？

オガワ ああ、そうだった。またスローデスを分けていただけないかなと思って…

アマリ まあ、そんなことだとは思ってたけどな。ずいぶんなくなるの早いんじゃない？まさか、

よそで上乗せして売ってるなんてことはないよね？

オガワ そんなことしませんよ、絶対。

アマリ ならいいんだけど。

オガワ 持ってきてくれたんですか？

アマリ いや、オレのところでスローデスはすっかり切り切りしちゃってね。

オガワ え……！

アマリ オレも探してるとこなんだ。持ってるヤツ見つけたら知らせてくれよ。

オガワ 元の方で何かマズいことでもあったんですか？

アマリ あったのかなあ？

オガワ ……他には何かありますか？

アマリ そうだなあ……

オガワ お願いします。

アマリ 冷たいもんなら少したら……

オガワ 錠剤ですよ。僕は注射はやらない。

アマリ わかった、なんとかするよ。

オガワ ありがとうございます。

アマリ だけど、ここんとこほんどに入って来ないんだよ。だから、ほんのちよつとだけだよ。
オガワ いつ？

アマリ あさつてだな。

オガワ もっと早くなりませんか？今夜とか？

アマリ 急いでも明日だなあ。

オガワ ……わかりました。

アマリ でも、大丈夫なのか？

オガワ 何ですか？

アマリ コレ（金）だよ。

オガワ 値上げしてるんですか？

アマリ いつもの1・5倍から倍……そのくらいはかかるよ。

オガワ ええ？！

アマリ オレも苦しいんだよ。

オガワ ……

その代わりすつごくいヤツだから。前も仕入れたことあるんだけど、
キミがいつも使ってるのとは質がちがう。

オガワ そうですか……

アマリ ま、オレを信じるんだよ。それだけの値打ちはあるよ。保証する。

オガワ わかりました。用意します。

アマリ 前金じゃなくていいからさ。

オガワ すいません。

アマリ お互い様じゃない。キミも失業中なんだし、いろいろ大変だろうしね。

オガワ 大丈夫です。前の仕事で金は結構残しましたから。

アマリ 何やってたんだっけ？

オガワ 簡単に言えば、ハッカーです。

アマリ そう。

オガワ 企業のAIにもぐり込んで情報盗んだり、ウイルス撒いたりね。

アマリ あんまり他人には言える仕事じゃありませんけど。

オガワ そんなことないさ、今の世の中、そういう仕事が大切なんだよ。

オガワ そうですかね。

アマリ なんて辞めちゃったの？

オガワ 神経が参っちゃいました。

アマリ ふうん。

オガワ デッキに向かうと拒絶反応起こすようになってしまった。

アマリ それで引退か。

オガワ ええ。でも、みんなだいたいそうらしいですよ。

オガワ 三十過ぎてこの仕事やってるヤツって滅多にいませんよ。

アマリ ボクサーみたいなもんだな。

オガワ だけど、ボクサーよりはずっと割がいいですから。

ボクサーなんて世界チャンピオンになったって、引退したらラーメン屋経営してポーツと暮らすくらいでしょ。そうだな。

オガワ でも、僕たちは5年もやれば、一生困らないくらい稼げますから。凄いな。

オガワ そんな、アマリさんだって相当稼いでるじゃないですか？ オレなんかダメだよ。

オガワ またあ。

アマリ いやほんと。オレは儲けはあんまり考えないから。

オガワ ほんとに？

アマリ ほんとだよ。だから、家帰っても頭上がらなくなつてさ。

オガワ 結婚されてるんですか？

アマリ ま、一応ね。

オガワ へえ、奥さんどんな方なんですか？

アマリ どうでもいいじゃない、そんなこと。

オガワ 知りたいな。

アマリ そんなことより、キミはどうなの？

オガワ 僕は別に……

アマリ 彼女くらいいるんだろ？

オガワ 必要ありませんから。

アマリ どうして？

オガワ 別に深い理由は……

アマリ ふうん……あ、そうだ、面白い本読んだんだ。

オガワ 本？

アマリ オオヤマネコの生態についての本なんだけどね。

オガワ オオヤマネコ？

アマリ 面白いんだよ。オオヤマネコのオスつてさ、敵をやつつけたら、

殺さないでオシッコかけるんだって。

オガワ へえ。

アマリ いいだろ？

オガワ はあ……

アマリ 殺さずにオシッコつてとこがいいんだなあ。

オガワ ……

アマリ 興味ない？

オガワ いえ、その……

アマリ ま、いいさ。でも、本は読んだ方がいいぞ。

オガワ はい……

アマリ じゃあ、また来るから。

オガワ わざわざどうも。

アマリ 手に入り次第連絡するよ。
オガワ お願いします。あ、あの……
アマリ 何？
オガワ イタバシって知ってますか？
アマリ イタバシって、クリニックのイタバシか？
オガワ ええ。
アマリ 知ってるけど……イタバシがどうしたんだ？
オガワ 僕を狙ってるって聞いたんですけど。
アマリ 狙ってる？
オガワ ええ。
アマリ へえ。どこから聞いたのかな？
オガワ 友だちから。
アマリ 友だちね。
オガワ ええ。
アマリ 気にすることはないよ。
オガワ でも……
アマリ その友だち、何て名前？
オガワ ウサミっていうんですけど……
アマリ ふうん。じゃ、今度イタバシに聞いといてやるよ。
オガワ お願いします。
アマリ ま、根も葉もない噂だとは思っけどね。
オガワ ……
アマリ あ、それとさ……
オガワ なんですか？
アマリ さっきの虫だけど。
オガワ はい。
アマリ 今晚あたりはまだ出るかも知れないけど、医者には行かない方がいいな。
オガワ どうしてですか？本当に痛いんですよ。
アマリ 思い出したんだけど、前にも知り合いのウチで大量発生したことがあったんだけど、一週間もしたらいなくなっただけだよ。
オガワ でも……
アマリ 大丈夫。痛みもすぐ消えるらしいし、どうしても我慢できないんだったら、来週になって医者を探せばいいさ。それまでには治ってると思うけどね。
オガワ はあ……
アマリ いいね、医者には行くなよ。笑われるぞ。
オガワ ……
アマリ 今日のところは、これ（白い錠剤）で我慢しなよ。
オガワ すいません。
アマリ じゃあ。（ハッセージBへ去る）

オガワ

連絡お願いします。

アマリ、外へ繋がるドアへ去る。

#2

オガワ、アマリから渡された錠剤を飲み、ウサミの頭を軽く叩く。
軽快な音楽。

ウサミ、突然しゃべり始める。

ウサミ

……というギブソン大統領の発言は、今後我が国の政局に大きな影響を与えるものと思われます。また、このギブソン発言を受けて中田幹事長は、

「当然、財界及び産業界の力を借りることになるだろう」とコメントし、

民間の協力を要請する意志があることを明らかにしました。経済界の動向も注目されます。

オガワ、舞台上に散らばっているものを集め、パッセージAへ去る。

ウサミ

昨夜遅く、都内数カ所で、麻薬、覚醒剤の一斉捜査が行われ、大量の麻薬、

覚醒剤が押収されました。押収された主な物は、スロージェスと呼ばれる麻薬で、

末端価格にして十五億円に及ぶものと見られております。このスロージェスは、

主に南米から持ち込まれているとみられ、今回の摘発によって、

大がかりな密輸グループの実態が明らかになるのではと期待されます。

また厚生省では、最近、若者を中心に広く出回っているこのスロージェスの有害性を

大きく問題として取り上げ、警察とともにスロージェス完全撲滅キャンペーンを行う模様です。

次に……

イタバシ プルルル、プルルル、プルルル……

ウサミ

昨日、臨海動物園で世界でも珍しいオオヤマネコの赤ちゃんが誕生しました。

イタバシ

はい、オガワです。ただいま留守しております。

ご用の方は、発信音のあとにメッセージをお入れください。ピーー！

ウサミ

このオオヤマネコは現在絶滅寸前で、臨海動物園の二頭を含めても三十九頭しか

確認されておらず、今回の二世誕生は、大変貴重なことで、世界中の注目を集めています。

イタバシ

もしもし、ウサミです。イタバシ先生が会って下さるそうなので連絡しました。

話だけでも聞いて下さい。ではまた。

ウサミ

続いて天気予報です。

オガワ、パッセージAから戻ってくる。

ウサミ

今日も引き続き雨雲が全国的に拡がっており、酸性雨の降り続く、イヤなお天気でしょう。では、各地のお天気です。

オガワ (ウサミの頭を叩く) おい!

ウサミ (立ち上がり) よう。

オガワ 勝手に入り込むな。不法侵入で訴えるぞ。

ウサミ それが友だちに対して言うセリフか?

オガワ 友だち? おまえが?

ウサミ ああ。

オガワ ただのハローワークの職員じゃないか。どうせまた、下らない仕事でも紹介に来たんだろ。

ウサミ そんな言い方はないだろ。オレは本当におまえのことが心配でさ。

オガワ 余計なお世話だよ。なんでいまさらオレが、なんとか商店の経理とか、

うんたら興業の事務とかやらなきゃなんないんだ?

だって、おまえ肉体労働は苦手だろ?

そういう問題じゃない。

何が?

オガワ オレは、働く必要がないんだよ。金はあるんだ。

ウサミ 嘘つけ。コンピュータのプログラマー5〜6年やっただけで、そんなに金残せるわけないだろ。

オガワ プログラマーじゃない。

ウサミ 悪い悪い、サイバースペース・カウボーイってやつだったよな? どんな職業なんだ?

ハローワークには登録されてないぞ。

おまえに信じてもらえなくてもいい。

ウサミ 悲しいこと言うなよ……

もう用はないんだろ? 帰ってくれ。

会わせたい人がいるんだ。

会いたくないね。

ウサミ きつと会って良かったって思うさ。

オガワ イヤだね。オレは誰とも会いたくないんだ。おまえともな。

ウサミ ……昨夜、おまえの彼女見かけたよ。

オガワ 彼女なんていない。

だから、昔のさ。

ウサミ ……それで?

見かけただけさ。

オガワ 何が言いたいんだ?

別に。たださ、彼女と一緒にだった時の方が良かったなあってさ。もっと笑ってたじゃないか。

オガワ 今だって笑うさ。

ウサミ あんまり見たことないな。

オガワ (笑顔を作る) ほら、笑ってやっただからもう帰れ。

オガワ、無意識にイタバシの頭に手を置く。

イタバシ ピー!

オガワ 誰だ、おまえ！

ウサミ イタバシ先生だよ。

オガワ イタバシ？

ウサミ イタバシ・クリニック院長、イタバシフミオ先生。

イタバシ どうも、初めまして。

オガワ おまえが会わせたいってのは、このジジイのことか？

ウサミ ああ、前にも話したことあるだろ？

オガワ じゃあ、もういい。帰ってくれ。オレには用がない。

イタバシ キミ、クスリやってるだろ？

オガワ ……やってみせよ。

イタバシ 隠さなくていい、私にはわかる。

オガワ 何がわかるんだ？

イタバシ 虫が大量発生してるんじゃないかな？

オガワ え……

イタバシ で、殺虫剤を大量に撒いたな。

オガワ 虫を殺すためですよ。

イタバシ たしかにね、殺虫剤は虫を殺す薬だ。

オガワ 当たり前でしょ。ウサミ、さっさとこのジジイ連れて帰れ！

ウサミ 先生の話が終わるまでは帰れないな。

オガワ なんだと！

イタバシ オガワくん、殺虫剤撒かないと眠れないんですよ。

オガワ だから？

イタバシ まあ、落ち着きなさい。キミは知らないと思うけど、市販されている殺虫剤の多くには

コカインの成分が含まれているんだよ。

オガワ まさか。

イタバシ いや本当だ。成分を完全に分解できれば、二百円ほどでコカイン1グラムが手に入るんだよ。

オガワ デタラメ言うな。

イタバシ ウチの患者にもよくいるんだよ、殺虫剤マニアが。敏感に匂いを嗅ぎ取るんだろうね。

オガワ 僕は関係ないですよ。

イタバシ 私たちはキミの味方だよ。

オガワ 味方なんて必要ない。帰って下さい。

イタバシ カウボーイを辞めた理由は、神経損傷かな？

オガワ え？

イタバシ カウボーイを引退したヤツらは、みんなクスリの常用者になるんだよね。

オガワ ……

イタバシ

常にアドレナリン高揚状態で活動していたから、辞めたからって普通の生活には戻れないんだ。それにはたいい神経損傷を起こしているから、クスリなしでは生きていけない体になっ

っているんだよ。私は、キミのような人間を何人も見てきた。

オガワ サイバースペース・カウボーイの存在を知ってるんですか？

イタバシ　もちろん。
ウサミ　オレも驚いたさ、おまえの話が本当だって知ったときにはな。
オガワ　ウサミ……

ウサミ　オレもおまえの味方だよ。

イタバシ　私の分析によると、キミたちのような人種は自殺志向があるらしい。

オガワ　……

イタバシ　私の組み上げたモデルによれば、キミはあと一ヶ月もすれば新しい^{すいぞう}臍臓が

必要になり、一年後には命をなくすことになるだろう。

だが、我々ならキミの神経損傷を治せる、と言ったらどうするね？

オガワ　……

イタバシ　どうするか、オガワくん？またサイバースペースに戻れるし、クスリも必要なくなるんだよ。

オガワ　嘘つくんじゃねえよ、って言ってるやります。

イタバシ　ほう。

ウサミ　オガワ。

オガワ　……それから条件をうかがいます。

イタバシ　ふうん。

オガワ　いくらかかるんです？

イタバシ　金はいらない。

オガワ　いらない？

イタバシ　キミがよく知ってることとそう変わらないことをしてもらっただけだ。

オガワ　……

ウサミ　うまくいくさ。おまえには見当もつかないだろうけど、クリニクは凄いもの持ってるんだ。

イタバシ　まあ、よく考えてみてくれたまえ。損な話じゃないと思うよ。

オガワ　……

イタバシ　これ（白い錠剤）飲みなさい。虫は出なくなると思うよ。

ウサミ　じゃあな。また来るよ。

ウサミとイタバシ、元いた位置へ戻る。

オガワ、錠剤を飲む。

音楽。

暗転。

3

暗転。

音楽の中、床に置かれたテレビのスイッチが入り、オガワが砂嵐の画面を見ている。

舞台中央にエンドウが立っている。

電話が#プロログと同じ位置に置かれている。

エンドウのコートが電話の側に置かれている。

エンドウ、大量の白い錠剤を一気に飲み込み、倒れる。

オガワ、エンドウの異変に気づき、エンドウの胸に耳を当て心音を確認したり、口に手を当て呼吸を確認めたりするが、何も反応がないのであわてて電話に走る。エンドウ、むっくり上体を起こす。
音楽消える。

エンドウ 何してんだ？

オガワ ……大丈夫なのか？

エンドウ ああ。

オガワ なんだよ、驚かすなよ。(電話を置く)

エンドウ あー、どうもいかん。

オガワ ほんとに大丈夫なのか？

エンドウ オレ、窒息していたようだな。

オガワ ああ、びっくりしたよ。

エンドウ 本当にガタがきてるな。アル中のジジイみたいだ。

オガワ 何言ってるんだよ、そんな身体して。

エンドウ 人間ってこんなふうにして死ぬんだな。

オガワ だけど、本当に頑丈なヤツだな。普通だったら死んでるところだぞ。

エンドウ そうか？

オガワ いったいいくつ飲んだんだよ？

エンドウ さあな、全部だ。

オガワ 全部？

エンドウ ああ。

オガワ あんた、あれ一錠いくらすると思ってるんだよ？

エンドウ 知らない。

オガワ ……まったく。でも、死ななくてほんと良かったよ。

エンドウ オレが倒れたとき、おまえ何しようとした？

オガワ 救急車を呼ぼうとしたんだよ。

エンドウ 信じられない。

オガワ なんで？

エンドウ オレがくたばったら、おまえが何するかぐらいわかってる。

オガワ なんのことだよ？

エンドウ オレの隠したヤクをかつばらうんだろうな。そこら中引っかき回して。

オガワ そんなことしないよ！

エンドウ わかるもんか、知り合ってまだそんな経ってないしな。

オガワ それはこっちのセリフだろ。だいたい、あんた誰なんだよ？勝手に他人ひとの部屋に

住み着いちゃってさ。

エンドウ ユキオです。

オガワ それはわかったよ。

エンドウ じゃあ、いいじゃない。

オガワ よくないよ。
エンドウ どうして？

オガワ どうしてって、名前だけじゃ何にもわからないだろ。それに、名前だって嘘かもしれないしさ。
エンドウ 何言ってるんだよ、嘘みたいな生活してるくせに。
オガワ どっちが。

エンドウ 気に入らないなら、追い出せば。
オガワ でも、そんなことしたら暴力ふるうだろ？

エンドウ まあな。

オガワ じゃあ、いいいいよ。

エンドウ そうか、それじゃあ、もうしばらく厄介になるとするか。

オガワ まいったな。

エンドウ 何言ってるんだよ。オレは手助けをしようとしてるんだ。

オガワ 誰の？

エンドウ おまえに決まってるだろ。

オガワ なんで？

エンドウ おまえが必要だからさ。それに、おまえもオレが必要だから。

オガワ オレの心が読めるのかよ？

エンドウ 心は読むもんじゃない。いいか、おまえみたいに活字の必要ない人間でも、

まだ活字に毒されてる。気をつけた方がいいよ。

オガワ ……ま、いいや。いただけいなよ。

エンドウ ああ。

オガワ でも、なんかヘンだな。

エンドウ 何が？

オガワ あんたと一緒にいてもうっとうしくないんだ。

エンドウ そりやおまえ、オレは根はいいヤツだからさ。

オガワ そういうことじゃなくて……

エンドウ なんだよ？

オガワ 何て言うかさ、あんたがいると安心するっていうか……

エンドウ ホモか、おまえ？

オガワ 違うよ！

エンドウ ヤだぞ、オレ。妙なことしたら、即、殴るからな。

オガワ だから違うって。

エンドウ でも、おまえ好かれるだろ、ホモに。

オガワ え？

エンドウ なんでもない。

オガワ ……だけど不思議だな。

エンドウ 今度はなんだ？

オガワ オレさ、あんたと向かい合っていると怖いんだよ。

エンドウ なんだ、それ？

オガワ 素朴な動物的恐怖っていうのかな？
エンドウ ほお。

オガワ ずいぶん長いこと極限状態で生きてきたから、
本当の恐怖っていうのがどんなものか忘れかけてたよ。
エンドウ なんだよ、オレといると安心するんじゃないのか？

オガワ だからさ、逆の意味でね、安心するんだ。
エンドウ 面倒くさいヤツだな。

オガワ なんていうのかな……この部屋って、人が死ぬのにちょうどいい。
ここで殺されるかもしれない、ってね。

エンドウ ……
オガワ あんたが銃を持っていたりしても、不思議はないもんな。
エンドウ 持ってるよ。

エンドウ、コートのポケットから無造作に銃を出し、オガワの眉間に銃口を押しつける。
オガワ、エンドウの目を見つめる。

エンドウ、引き金を引く。
何も起こらない。

エンドウ 弾丸がないんだよ。

オガワ ……ああ〜！

エンドウ 怖かったか？

オガワ ちよつとだけ。

エンドウ 情けねえなあ。

オガワ それいくらくらいした？

エンドウ そんなしない……2〜3万だったかな。

オガワ ふうん。

エンドウ おまえに売ってやるよ。(銃を渡す)

オガワ ほんと？

エンドウ ああ。価値のある人間はすべて銃が必要だ。危害を加えようとする連中から身を守るために、
絶対持っているべきだな。

オガワ そんな連中大勢いる。

エンドウ そうか。でも、いつ誰を撃てばいいかを間違えないことだ。

オガワ どうしたら間違えない？

エンドウ クスリをもう一服やればわかる。

オガワ ほんとに？

エンドウ ああ。オレはずっとそうしてきた。クスリをもう一服やれば、

オレの脳ミソはひとりでに治るのがわかってるんだ。脳ミソが治れば間違えっこないさ。

オガワ ふうん。

エンドウ とにかく、弾丸を買いに行こう。弾丸なしじゃ、何の役にも立たないからな。

オガワ ああ。
エンドウ 絶対安全な売人を紹介してやるよ。(コートを着る)
オガワ 頼むよ。

音楽。

オガワとエンドウ、パッセージAに去る。
すぐにオガワだけがコートを羽織って戻ってくる。

オガワ、エンドウと会話を続けているような雰囲気のまま、一人でパッセージBから出て行く。

4

音楽が消えると、ウサミとイタバシが現れる。
二人とも、スーツを着ている。

ウサミ オガワ？いないのか？オガワ？(パッセージAの方のドアをのぞきにいく)
イタバシ ……(部屋の床などを調べている)

(舞台上に戻って) おかしいな、滅多に外出するヤツじゃないんですけど……

イタバシ キミの留守電聞いて逃げ出したのかな？

ウサミ 連絡しない方がよかったですかね？

イタバシ しかし、相当重症だね、キミの友だちは。

ウサミ え？

イタバシ この部屋の感じといい、床に落ちているスローデスの粉といい、
完全に中毒を起こしているようだな。

ウサミ やっぱり。

イタバシ 早めに入院させないと、命取りになるかもしれないな。

ウサミ なんとかしても説得しますから、よろしくお願いします。

イタバシ わかった。

ウサミ でも、なんでクスリなんか始めたんだろう……

イタバシ 始めた動機なんて大したことじゃないさ。売る人間がいれば、買う人間もいる。

資本主義の原則だよ。

ウサミ だけど、そんなものに手を出すようなヤツじゃなかったんです。

イタバシ キミの気持ちもわかるが、問題はなぜ始めたかではなく、どうしたら救ってあげられるかだ。
ウサミ はい。僕もあいつを助けたいんです。

イタバシ わかるよ。私だって、一人でも多くの人間を救いたいんだ。ぜひ手伝わせてくれたまえ。
ウサミ お願いします。

イタバシ 彼がクスリを始めたのはいつごろからかな？

ウサミ はっきりとはわかりません。

イタバシ そう。

ウサミ でも、ちょうど僕が担当の失業者リストの中にオガワの名前があつて訪ねてきたら、

様子がおかしかったんです。

イタバシ それはいつ？

ウサミ 二ヶ月前です。

イタバシ どうおかしかったのかな？

ウサミ 妙なことを言って……自分はサイバースペースで神経をやられたんだって……

イタバシ ……

ウサミ あいつ、元々はコンピュータのプログラマーだったんですよ。

でも、脳とコンピュータを直接繋いでサイバースペースにジャック・インしたとか、

そこで企業戦争をやってたとか……

イタバシ 妄想だな。

ウサミ ええ。サイバースペースは、コンピュータと脳を直接繋いだときに現れる空間だそうで、

肉体的には経験してないのに、脳は直接経験してるんだとか……

イタバシ どうしてすぐに連れて来なかったんだ。

ウサミ すみません。でも、オガワとはそんなには親しい関係ではなかったので、つい。

イタバシ 友だちだったんだよね？

ウサミ 厳密には違うんです。小学校が同じで、あいつは成績優秀者だったんでよく覚えていたって

いうか……

イタバシ じゃ、キミもそんなによくはオガワくんのことを知らないわけだ。

ええ、まあ……でも、自分の知ってる人間が不幸になるのを見て、見ないフリはできませんから。

イタバシ 立派だな。

ウサミ いえ、そんな……

イタバシ なかなかできないことだよ。

ウサミ ありがとうございます。

イタバシ さてと、そうなるんだな、彼は今どういう経済基盤でもって生活しているのかな？

ウサミ と、おっしゃいますと？

イタバシ つまりだ、どうやってクスリを買い続けているか、ということだよ。

ウサミ ああ、それは退職金と失業保険、それに貯金を食い潰してるんでしょうね。

イタバシ まだ資金はあるのかな？

ウサミ さあ、詳しいことはわかりませんが、貯金は結構あるようなことは言っていました。

嘘かもしれません。

イタバシ そうか……

ウサミ 入院費とか相当かかるんですか？

イタバシ いや、私のところは最新の設備を導入しているんでね、それで少しは……ね。

ウサミ それは当然ですよ。

イタバシ ボランティアではできないから。

ウサミ 大丈夫だと思えますよ。ご両親も健在だったと思いますから。

イタバシ そうか。ご両親には連絡したの？

ウサミ いえ、まだ。

イタバシ 連絡しておいた方がいいな。何かしてもらおうこともあるだろうから。

ウサミ わかりました。

イタバシ キミも忙しいだろうけど、ひとつ頼むよ。

ウサミ とんでもありません、こちらがお願いしてるんですから。

イタバシ これは私の持論なんだが、中毒になった者を排斥してはいけない。麻薬の使用者、常用者の半分、いや大部分は自分が何をやっていいのか、何の中毒にかかっているのかさえわかってないんだよ。

ウサミ こわいなあ。

イタバシ とにかく、力を合わせて社会悪と対決していくしかないんだ。

ウサミ はい！

間。

イタバシ それにしても、どこへ行ったのかな？（腕時計を見る）

ウサミ 先生、お時間の方は？

イタバシ うん、クリニックは各担当に任せてあるんだけどね……

ウサミ そんなに遠くに行ったとは思えませんがね、鍵は開いてたんだし。

イタバシ そうだね。携帯の番号とかわからないの？

ウサミ 持っていないですよ、あいつ。

イタバシ なるほど。

ウサミ ちよつとその辺、見えます。（パッセージBへ去る）

イタバシ おい、ウサミくん……

イタバシ、一人残される。

#5

イタバシ、時間を気にしながらも、仕方なく部屋の中をうろつろつしている。

オガワがパッセージBから戻ってくる。

オガワ おい、何やってるんだ！

イタバシ え？あつ！

オガワ 誰だ、おまえ？

イタバシ オガワくんですね？

オガワ オレが質問してるんだ。答えろ。

イタバシ 私、イタバシと申します。

オガワ イタバシ？

イタバシ ええ、あなたのお友だちのウサミくんに連れられてきました。

オガワ ウサミ？

イタバシ はい。聞いてませんか？

オガワ ウサミって、職安のおせっかい野郎のことか？

イタバシ ええ。お友だちなんでしょ？
オガワ 友だちなんかじゃない。
イタバシ そうですか。そんなに親しくはないって、彼も言っていました。
オガワ で、何の用だ？仕事の話なら帰ってくれ。
イタバシ いえ、仕事の話ではなくて……
オガワ じゃあ、何の用だ？
イタバシ あの、少し落ち着いて……
オガワ いいから質問に答えろ！
イタバシ 私、ウサミくんに頼まれただけでして……

ウサミ、パッセージBから戻ってくる。

ウサミ ただいま。あれ、オガワ、戻ってたのか。心配したよ。
オガワ 何しに来た？
ウサミ 留守電聞かなかったのか？
オガワ 聞いてない。
ウサミ そうか。おまえに先生を紹介しようと思ってさ。
オガワ 仕事をする気はないよ。
ウサミ 仕事の話じゃないよ。
オガワ じゃあ、なんだ？
ウサミ この前話しただろう、クリニックのこと。
オガワ オレは中毒患者じゃない！
ウサミ でも、実際にクスリを使用してるじゃないか。
オガワ ああ、使ってるよ。でも中毒じゃない。生きるために必要なんだ。
イタバシ それを中毒って言うんだよ、オガワくん。
ウサミ 現実を見ろよ。オレはおまえを助けたいんだ。
オガワ もしあんたたちが糖尿病にかかってたら、インシュリンが必要だろ？
それともインシュリンを打たずに、死ぬのを待つか？
イタバシ インシュリンとスロージェスは違うよ。
オガワ 違うない。オレにとつてのスロージェスは、生きるために必要不可欠なんだ。
ウサミ クリニックで治療すれば、スロージェスなしでも生きていけるようになるんだぞ。
オガワ ならない。
ウサミ どうして？
オガワ オレは、おまえらとは違う空間を生きてるんだ。
ウサミ サイバースペースか？そんなもの実在しないんだよ。
オガワ サイバースペースじゃない。
ウサミ じゃあ何だ？
オガワ おまえに話しても無意味だ。
ウサミ なんだと？

イタバシ まあ、待ちたまえウサミくん。キミが興奮しちやいかんよ。
ウサミ すみません。

イタバシ ねえ、オガワくん、話だけでも聞いてくれないかね？

ウサミ そうだ、オガワ、先生の話だけでも聞いてくれ。クリニックに入るかどうかは、それから決めればいいんだからさ。

オガワ おまえ、なんでそんなに一生懸命なんだ？

ウサミ おまえに立ち直ってほしいからだよ。

オガワ そっちの先生が一生懸命なのはよくわかるけどさ、だって商売だもんな。でもおまえ、何になるんだ？紹介料とかあてにしてんのか？

ウサミ なに！

オガワ それとも善行を施すつてのは、そんなに気持ちいいことなのか？

ウサミ いい加減にしろ！

イタバシ ウサミくん。

ウサミ しかし……

イタバシ オガワくん、ウチでは薬物治療なしでリハビリを行うんだよ。

オガワ ……

オガワ、二人を無視して、テレビのスイッチを入れ、砂嵐の画面を見る。

ホワイトノイズが聞こえてくる。

オガワ、テレビのボリュームを操作して、次のイタバシの話の邪魔をする。

イタバシ

入院するとなれば、肉体の塩基性流動体、特に脳の中にあるそれから生まれる症状を

キミは経験するだろう。ノルアドレナリンとかセラトニンのようなカテコラミンのことを

言ってるんだけどね。こんなふうに作用するんだ。すなわち、物質D、スローデスの主成分だな。

まあ、事実すべての中毒性のあるクスリはそうなんだが、

なかでも物質Dはカテコラミンと相互作用を行うので、亜細胞面の決まった場所に

障害が生じて固定する、生物的反適応症を生じるってことだ。しかし、だ……

オガワ、ボリュームを最大にして、イタバシの話を遮ってから、音を消す。

オガワ

そんな話、興味ないな。

イタバシ

そうか、リハビリテーションを行ってもらおうなんて考えついたことで、

キミはたしかに不安になっているな。

オガワ

……

イタバシ

それは意図的でネガティブな徴候の一つの表れなんだ、キミの恐怖心のね。

オガワ

クリニックから逃れ、そこ関係を断ちたいっていう、スローデスが言わせた言葉なんだ。

オガワ

バカ言うな。

イタバシ

キミが考えている以上に、そんな人は多くいるんだよ。

オガワ

オレは違うよ。

イタバシ 一日一日と増えている。この世は病気の世界だ。ますます悪くなるばかりだ。
オガワ オレは誰も抱えていない問題をいっぱい抱えているだけなんだよ。
イタバシ いや、同じだな。

オガワ あんたにはわからないんだ。

イタバシ この部屋の臭い……おそらく硝酸タリウムだろうけど、殺虫剤を大量に撒いてるね。
オガワ 虫がいるもんでね。

イタバシ スローデスが不足してるんだろ？

オガワ 何？

イタバシ よく中毒者がやるんだよ、クスリがないときにね。

オガワ ……

イタバシ キミ、彼女いないんじゃないか？

オガワ 関係ないだろ。

イタバシ コカイン系は催淫効果があるから、やればやるだけセックスに夢中になるけど、

スローデス中毒者はね、クスリの効果で生殖機能を抑制させられるから、

知ってる通りセックスに関心を失ってしまうんだよ。

うるさい！あんたの話はもう十分聞いたよ。

オガワ キミがスローデス中毒だつてことわかったかね？

オガワ オレは中毒じゃない。

イタバシ じゃあなんなんだね？

オガワ あんたちと違う世界を生きてるんだよ。

ウサミ オガワ、それは違うぞ。おまえもオレたちと同じ世界を生きてるんだ。目を覚ませよ。

オガワ 目なんか覚ます必要ないね。

オレはおまえたちのようなニセモノに取り囲まれて生きていきたくないんだ。

何言ってるんだ、おまえの方こそ幻覚の中にいるんだぞ。

何にもわかっちゃいないんだな。ま、だからこんなおせっかいしに来てるんだらうけどな。

ウサミ どういうことだ？

オガワ どういうことつて、少しは自分で考えてみる。

おまえのやっつてることに本当のことがいくつあるんだ？

生まれてから今までにどれだけの体験をした？

行ったことのある土地がいくつある？

本当に見たもの、見た事件がいくつあるんだ？

おまえらのしてることは全部疑似体験なんだよ！

ウサミ じゃあ、おまえはどうなんだ？

オガワ オレはサイバースペースであらゆる体験をしたし、あらゆる情報に触れた。

それにスローデスで直接脳を刺激することによって、

おまえたちが絶対体験できないことも知ってるさ。

それは本当のことじゃないだろ。

オガワ 本当のとき。オレは脳が主導権を持つ世界に生きてるんだ。

ウサミ ちよつとは自分の体のことも考えるよ。

イタバシ キミは自殺行為をしてるんだぞ。スローデスっていうのは、
ゆっくりと死に向かわすんでそう呼ばれているんだ。

オガワ オレはあんたちとは違う生き物なんだから、寿命が違うのは仕方ないでしょ。
オレはあんたちの何倍も濃密に生きてるんだから、
あんたたちより早く死のうが全然かまわないですよ。
さあ、もうほっといてくれ。オレがやっと手に入れた世界を奪うのはやめてくれ。
わかつたらとつと出て行け！

オガワ、テレビのホワイトノイズを再びフルボリュームにする。

イタバシ ……ウサミくん、ひとまず帰ろう。

ウサミ 思ったよりひどいですね。

イタバシ ああ、本当に重症だ。

ウサミ すぐに入院させた方がいいですよね。

イタバシ 手配するよ。

ウサミ お願いします。

ウサミとイタバシ、パッセージBへ去る。

#インサート

オガワ、テレビを消す。

しかし、ホワイトノイズのような虫の羽音は消えない。

オガワ くそお……

オガワ、銃を抜き、虚空に銃口を向ける。

しかし、虫の羽音は消えない。

オガワ、銃口をこめかみに当てる。

アマリ、その様子をパッセージBから見ている。

オガワ、引き金を引こうとするが引けない。

アマリ、部屋に入ってくる。

アマリ 安全装置がかかっているんじゃないか？

オガワ ……

アマリ どうした、やらないのか？

オガワ やってくれませんか？

アマリ やだね。

オガワ ……クスリ、手に入ったんですか？

アマリ まだだ。

オガワ じゃあ？僕は連絡した覚えはありませんけど。

アマリ おいおい、そんな言い方はないだろ。オレは、キミのことが心配でさ。どうして？

アマリ キミが、ワダのところへ弾丸買いに来たって聞いたからさ。

オガワ 耳がいいんですね。

アマリ こういう商売は耳がよくないとね。まあ、それでちょっと様子を見にきたんだよ。そうですか。

オガワ だけど、とりあえずは安心したよ。その銃使って何かしようっていうんじゃないんだろう？ええ……

アマリ でもさ、これからはオレに言ってくれよ。オレだって用意してあげられるんだから。わかりました。

アマリ オレはキミの味方だよ。

……アマリさんは、なんでクスリやらないんです？

アマリ 必要ないからさ。

オガワ どうして？

アマリ オレはね、ニセモノが大好きなんだよ。だから、オレにはクスリは必要ない。

……

アマリ だいたい、オレにとって本当のことって、単純でつまらないものなんだ。

事故で友だちが死ぬとか、子供がきちょうとか、刺されたら痛いとかさ……

そんなに大したことじゃない。それよりもオレの周りには、もっと複雑でもっと感動的なニセモノがたくさんあるんだよ。それを見る方がよっぽど楽しいし、

オレを遠くへ連れて行ってくれる。

オガワ そういうのわからないな。

アマリ 当たり前だろ。キミにオレのことがわかるわけがないさ。

……

アマリ もちろん、オレにだってキミのことはわからないしな。

でも、アマリさんは僕の味方なんでしょ？

アマリ ああ。オレにとつてのキミのことはよくわかる。

なんか誤魔化されてるみたいだな。

アマリ そんなことないさ。

……

アマリ クスリ、今晩中になんとかかなりそうだから。

本当ですか？

アマリ ああ、連絡がついてね。なんとかなるって。

ありがとうございます。

アマリ それまで少し寝たらどうだ。目が死んでるぞ。

ええ……

アマリ じゃあ、あとでな。

アマリ、パッセージBへ去る。
オガワ、ゆっくりと体を横たえる。
暗転。

オガワ、舞台中央に倒れている。
テレビ、電話はなくなっている。
エンドウ、じつとすわり込んだままオガワを見ている。
突然、オガワが跳ね起きる。

オガワ あー！

エンドウ どうした？

オガワ ……夢を見た。

エンドウ おまえ、まだ夢なんか見るのか？

オガワ あんたは見えない？

エンドウ ああ見ないね。見たとしても、それは夢じゃなくて現実なんだ、オレにとってはな。

オガワ 空飛んだり、猫が喋ったりしても？

エンドウ オレは空も飛べるし、猫とも喋れるんだよ。

オガワ なるほどね。

エンドウ おまえももうすぐそうなるさ。

オガワ そうかな……

エンドウ どんな夢だった？

オガワ 忘れた。

エンドウ 忘れた？

オガワ ああ。

エンドウ おまえなあ、オレたちは忘れてたりしないんだよ。

オガワ どうして？

エンドウ 記憶はなくならないの。引き出せないだけさ。力不足なんだよ、おまえ。

オガワ そうか。

エンドウ もっとクスリやらないと、いつまでも脳ミソ治らないぞ。

オガワ わかってる。

エンドウ 今度いつ手に入るんだ？

オガワ 早くて明日だって言ってた。

エンドウ 明日か……

オガワ 我慢できないのか？

エンドウ わかんないなあ。

オガワ

でも、あんたが来てから、今までの3倍も4倍も早くなくなっちゃうからさ、アマリさんもなかなか用意できないんだよ。少しは我慢しなよ。

エンドウ オレが悪いって言うのか？

オガワ そうは言っていないだろ。ただ、オレ、アマリさんの他にクスリ売ってくれる人知らないから。探せよ。

オガワ うん。あんたは知らないの？

エンドウ 昔のヤツらとはちょっと顔を合わせたくないんだ。

オガワ どうして？

エンドウ ま、いろいろあつてさ。

オガワ ふうん。

エンドウ 今なんか持つてるか？

オガワ アシッドなら少しあるよ。

エンドウ くれよ。

オガワ いいよ。

オガワ、白い錠剤を渡す。

エンドウ、錠剤をかみ砕き、飲み込む。

オガワ なんでオレが寝てるあいだに盗らなかつたんだ？

エンドウ なんで？

オガワ さつきオレにも訊いただろ？

エンドウ だって、おまえはくたばったわけじゃないだろ？

生きてるヤツからむしり取ったりはしないさ。これでも仁義はわきまえてるんだよ。

へえ。

オガワ なんだよ？

オガワ こういうの好きだな。

エンドウ 何が？

オガワ 前にも危ない橋渡ったりするときは、いつも頭の中で独り言を言ってたんだ。

友だちとか、頼りになるヤツがいるつもりになって、本当に思ってることとか、

そのときの気分とかを話すんだ。

エンドウ 案外暗いんだな。

オガワ それから、向こうがそれについてどう思うかを聞くつもりになって、それを続けるんだ。

エンドウ ふうん。

オガワ あんたにいてもらうのも、それに似てる。

エンドウ そうか。

オガワ うん。

エンドウ おまえ、動物園行ったことあるか？

オガワ あるよ。

エンドウ 動物園では何したらいいんだ？

オガワ 何したらって……

エンドウ 動物園行ったことないもんだから、どんなとこだか想像つかないんだよ。

オガワ　ほんとかよ？
エンドウ　ああ。
オガワ　檻に入った動物を見て回ればいいんだよ。
エンドウ　やっぱりそうか。
オガワ　やっぱりって……
エンドウ　どんな種類の動物がいるんだ？
オガワ　いろんなの。
エンドウ　オオヤマネコはいるかな？
オガワ　オオヤマネコ？
エンドウ　ああ。
オガワ　でっかいとこならいるんじゃない？
エンドウ　でっかいとこって？
オガワ　臨海動物園とか。
エンドウ　臨海動物園ね。
オガワ　オオヤマネコが見たいのか？
エンドウ　いや、見せたいヤツがいるんだ。
オガワ　ふーん、女？
エンドウ　ああ。
オガワ　へえ、あんた彼女いるんだ。
エンドウ　いや。
オガワ　じゃあ誰なのよ？
エンドウ　もう8年くらい会ってないけどな、ちょっと見せたいヤツがいるんだよ。
オガワ　あんたの彼女だったんじゃないの？
エンドウ　さあな。誰の女でもないんじゃないかな？
オガワ　ふうん。
エンドウ　エリコって名前だったけど、おまえ知ってるか？
オガワ　知ってるわけないだろ。でも、エリコって名前の女は一人知ってる。
エンドウ　同じ女だったりしてな。
オガワ　違うよ。大学のゼミで一緒だったんだ。
エンドウ　なんて名字だった？
オガワ　忘れた。
エンドウ　またか。
オガワ　あんたのエリコさんはなんて名字だったんだよ？
エンドウ　エンドウ。
オガワ　同じじゃない。
エンドウ　ああ。
オガワ　まさか、奥さんだったりして……
エンドウ　たまたま同じだったただけだ。
オガワ　へえ……でも、考えてみると、オレももう8年も会ってないんだな。

エンドウ ふうん、そうか。

オガワ だけど、なんでオオヤマネコなんて見せたいんだ？

エンドウ オレのこと知ってほしくてな。

オガワ わけわかんないな。

エンドウ そのうち話してやるよ。

オガワ ああそう。

エンドウ アシッド、もう少しくれよ。

オガワ もうないよ、さっきので終わり。

エンドウ なんだ、あれでおしまい？

オガワ ああ。

エンドウ くそ、まいったな。

エンドウ、大の字になって床に横になる。

オガワ、エンドウの足下に立って、エンドウを見つめている。

エンドウ なあ。

オガワ なんだよ？

エンドウ いや、いや。

オガワ なんなんだよ？

エンドウ うん……

オガワ 何かほしいのか？

エンドウ いや、そうじゃなくってさ……

オガワ じゃあなんだよ？

エンドウ (体を起こし) 死んでるのに外界が見えたりしたらどんなかなあ、ってさ。

オガワ 何言ってるの？

エンドウ だからさ、見えるには見えるんだけど、目の筋肉を動かすことができないから、

焦点を合わせられないんだな。それにクビも回せないし、目玉も動かせない。

物がそばを通り過ぎるまで待つしかできないんだよ。ただ見つめ続けてる。

見るのをやめることができないんだ。それってどんなだろう？

オガワ どんなも何も、それが死ぬってことだよ。

エンドウ ほか。

オガワ あんたは、あんたの目の前にあるものを全部見るのをやめることができないんだ。

そこに何を置かれても、あんたは選んだり、替えたりできないんだな。

置かれた物をそのまま受け入れることができるだけなんだよ。

つまり考えなくていいってことか……そんなに悪くないかもしれない。

でも、目の前に鏡置かれたりしたらどうする？永遠に自分を見つめるんだぞ。

オガワ 自分じゃないだろ。

オガワ どうして？

エンドウ だって鏡の右手は左手だろ。

オガワ そりゃそうだけど。
エンドウ 鏡の中のヤツは別のヤツだ。
オガワ 別のヤツってことないだろ、逆さまの自分なんだから。
エンドウ いや、似てるとこはたくさんあるけど、別のヤツだ。
オガワ そんなことないよ。
エンドウ おまえ、本物の自分、見たことあるのか？
オガワ 本物の自分……
エンドウ オレは見たことあるよ。
オガワ どうやって？
エンドウ おまえにだって見れるさ。いや、見たことあるはずだ。
オガワ え？

音楽。〔EVERY BREATH YOU TAKE〕／ POLICE)

オガワ、エンドウと向き合い、手のひらを合わせる。

オガワ ……あんたがここで何をしてるかは訊かないけどさ、オレは何してると思う？

突然、ホワイトノイズと留守番電話のP音が鳴り響く。

オガワは頭を抱えて倒れ、のたうち回る。

エンドウ、それを見ている。

#7

イタバシがパッセージAから、ウサミがパッセージBから現れる。
二人は、#2と同じ衣装を着ている。
ノイズが消えていく。

ウサミ よお。返事がないんで勝手に入って来たぞ。

イタバシ お邪魔しますよ。

オガワ ……

ウサミ あれ、お客さんか？珍しいな。

エンドウ どうも。

ウサミ あ、はじめまして、ウサミと申します。

イタバシ イタバシです。

エンドウ あ、どうも、どうも。

オガワ 何の用だ？

ウサミ 決まってるだろ、今朝の返事を聞きに来たんだ。

イタバシ どうだね、考えてみたかね？

オガワ まあ、一応。

ウサミ それでどうなんだ？やってみるか？
オガワ 条件次第ではな。

ウサミ そうか、そりゃ良かった。
オガワ あくまで条件次第だぞ。

エンドウ おい、何の話だ？
オガワ あんたには関係ないことだよ。

エンドウ なんだ、おい、冷たいこと言うなよ。
オガワ 本当に関係ないんだってば。

エンドウ ちえっ、なんだよ、水くさいな。
オガワ 詳しい条件を教えてくださいか？

イタバシ ああ、いいとも。しかし、こちら（エンドウ）が、ねえ……
オガワ ちよつと奥の部屋へ行つてくれないか？

エンドウ なんだ、オレがいたらマズいのか？
オガワ マズくはないけどさ……

エンドウ じゃあ、いいだろ。おとなしくしてるからさ。
オガワ でも、プライベートなことだから。

エンドウ プライベートなこと？
オガワ 頼むよ。冷蔵庫にビール入ってるからさ、それでも飲んでてよ。

エンドウ わかったよ。じゃ、どうも。
ウサミ すみませんね。

エンドウ いえ、どういたしまして。

エンドウ、パッセージAへ去る。

ウサミ 誰なんだ、あいつ？

オガワ 仲間だ。
ウサミ 仲間？あいつもサイバースペース・カウボーイなのか？

オガワ いや。
ウサミ じゃあ、何だ？クスリの売人かなんかか？

オガワ どうでもいいだろ。
ウサミ でも、なんかヤバそうなヤツだな。ねえ、先生。

イタバシ そうだな。
ウサミ 間違はなくヤク中ですよね。

オガワ あいつのことはどうでもいいだろ。それより条件を教えてください。
ウサミ そうだな。先生。

イタバシ うん。単刀直入に言おう。
オガワ そうしてもらえるとありがたいですね。ごちゃごちゃ言われて誤魔化されるのはごめんだ。

イタバシ キミにサイバースペースで一仕事してもらいたい。
オガワ サイバースペースで？

イタバシ そうだ。

オガワ 何をすればいいんです？

イタバシ ある企業のAIに入り込んで、そいつを潰してもらいたい。

オガワ え？

イタバシ キミも十分承知してると思うが、現在の社会において、力とは企業力を意味するんだよ。すなわち、人類史の進路を形作っている多国籍企業は、かつての障害を超越して全球的に力を及ぼしている。

しかも、有機体としてみるなら、一種の不死性をも獲得しているのだ。

主な経営陣を十人ばかり殺したところで、企業は死なない。別な連中が待ちかまえていて、階段を上り、空席を占め、企業メモリの膨大なバンクにアクセスするからだ。

イタバシ つまり、そこに我々の狙いがある。

オガワ ちよつと待つて下さい。あんた麻薬クリニックの院長さんなんですよ。

イタバシ そうだよ。

オガワ なんでそんな人が、企業戦争の中枢の話に関係したりするんです？

イタバシ もつともな疑問だな。

オガワ そこをちゃんと説明してもらわなくちゃ。

イタバシ いいだろう。今朝も言ったが、引退したカウボーイはキミのように、

ほとんどクスリの中毒を起こすんだ。ウチのクリニックにも何人もいたよ。

最初は彼らの言うサイバースペースの話なんて全然信用してなかったんだが、ひょんなことで私も経験してしまつてね。患者の一人を納得させようと思つて試してみたら、ジャック・インできてしまつたんだよ。

サイバースペースを体験したんですか？

イタバシ ああ。

ウサミ だから、オレも信用したんだ。

オガワ ……それで？

イタバシ まあ、私にはそんなにそつちの能力はなかったらしくて、複雑なAIには

入り込めなかつたんだがね、一般の人が知らない企業戦争の実態は知ることができた。

オガワ ……

イタバシ そこで私は考えた。ウチのクリニックでサイバー戦士を再生して、

その戦争に参戦してやろうつてね。

オガワ どうして？

ウサミ 決まつてるじゃないか、人類の平和のためだ。

イタバシ その通り。平和のためには、争いの根本を断つに限る。

オガワ バカなこと言うな。

イタバシ バカなことじゃない！なぜ人間はみな平等に、幸せに、平和に暮らすことができないんだ？

力を持った者がいるからだ。それも人間じゃない。不死性を持ったAIのせいなんだ。

人間の持つる力なんてたかがしれてる。殺されてしまえばそれで終わりだからな。

でも、AIは違う。ちよつとぐらゐのダメージを与えても、すぐに再生してくる。

とどめを刺さなければな。

ウサミ な、わかるだろ？

オガワ あんた、企業のAIにとどめを刺すって、どういうことか知ってるのか？

イタバシ まあね。

オガワ まあねって、ウィルス撒き散らしてAIを混乱させるのとはわけが違うんですよ。

カウボーイの命と引き替えでも成功するかどうか怪しいもんだ。

わかっている。これまでも何人もの戦士が勇敢にも戦いを挑み、そして戦死していった。

冗談じゃない。そんなのはお断りだ。

オガワ どうして？

イタバシ 自殺行為だ！

オガワ キミが今やっていることだって、自殺行為じゃないのか？

オガワ ……

イタバシ だから言ったろ。キミたちのような人種は自殺したがっているんだよ。みんなそうだ。

それもクスリなんかじゃなく、サイバースペースで思いっ切り高揚した状態で

死にたいと願ってる。私も少ない経験しかないが、そういう気持ちはよくわかるよ。

オガワ ……

ウサミ おまえには、ティスエ・アシユプール社のAIを狙ってもらうことになってる。

オガワ ティスエのAI？

イタバシ やってみたいだろ。いや、きっとキミはやるに違いない。

ウサミ 人類のためにもやってくれよ。

オガワ でも……

イタバシ なんだね？

オガワ そんなことして何が変わるんだ？それにあんたいったい何がしたいんだ？

イタバシ いい質問だ。私はとにかく衝動に駆られている。わけもわからずにね。

仮に、キミに私の考えそのものを正確に伝えようとなると、キミの一生の二回分の時間がかかる。

それほどじつくり考えたんだ。それでも私にはわからない。

だが、果たしてわかる必要があるんだろうか？

オガワ 無責任な言い方だな。

イタバシ そうかな、キミは理解できるんじゃないのか？

オガワ ……

ウサミ どうする、オガワ。やってみるか？

オガワ ちょっと考えさせてくれ。

ウサミ 考えることなんかないさ。

オガワ うるさい、黙ってる！

ウサミ ……

イタバシ 大丈夫。きっとオガワくんはやるさ。

エンドウ、戻ってくる。

エンドウ あの、お取り込み中申し訳ありませんが、なんかクスリ持ってません？

イタバシ ……なんだね、キミは。
エンドウ エンドウユキオです。

ウサミ オガワのお友だちだそうぞ。

エンドウ ええ。オレはこいつの片割れなんですよ。

イタバシ で、エンドウくん、何の用かな？まだ、私たちの用は済んでないんだが。

エンドウ おっさん、難聴か？なんかクスリ持ってないかって訊いてるんですよ。

イタバシ ……

エンドウ スローデスがなかったら、コークでもスマックでもアシッドでも、なんでもいいんだけどな。

オガワ おい、よせよ。向こうに行ってるよ。

エンドウ わかってるよ、クスリもらったら向こう行くって。

イタバシ キミもヤク中か？

エンドウ ヤク中？ああそうですよ。オレはヤク中、それも筋金入りのね。

オガワ よせって。

エンドウ 持ってるんだろ、イタバシさん？

イタバシ 持ってないよ。

エンドウ またあ、とぼけて。

イタバシ よしたまえ！

エンドウ オレさ、あんたがクリニック隠れミノに、警察とつるんで横流ししてるの知ってるんだよ。

オガワ え？

イタバシ 何言ってるんだ。ヘンな言いがかりはやめたまえ。

エンドウ 言いがかり？

エンドウ、イタバシのポケットをまさぐる。

イタバシ やめたまえ！

エンドウ、粉薬の袋を見つけ、イタバシの腕をねじ上げる。

ウサミ 先生！

オガワ おい、よせ！

エンドウ ほらみろ、持ってるじゃねえか。

エンドウ、粉薬を手にする。

エンドウ な、このジジイは悪党なんだからよ。

オガワ どういうことなんだ？

エンドウ どうもこうもねえよ。こいつは、ヤク中のヤツらを食い物にしてるんだよ。

裏の世界じゃ有名なんだ。だまされんなよ。

オガワ ……

イトバシ、粉薬を口に入れるが、すぐ咳き込み、うずくまって吐き出す。
イトバシのほしいようなクスリは持ち合わせてない。

エンドウ
……

イトバシ オガワくん、この人の言うことは気にしない方がいい。

大方禁断症状でわけがわからなくなってるんだろう。

ウサミ そうだよ、おまえには大きな使命があるんだ。

オガワ 自殺することか、サイバースペースで？

ウサミ 違うよ。社会悪を叩き潰して、生還するんだ。

オガワ どうでもいい……

イトバシ おい、どうしたんだ？

オガワ どっちにしる、死ねって言ってるんだろ？

イトバシ そんなことはないさ。ウサミくんが言うように、生還することだって可能なはずだし、

もしそうならキミは英雄だ。それに充実感が違う。キミもそれはよく知ってるはずだ。

わかるだろう？キミは我々と一緒に行くのが正解なんだよ。

エンドウ うるせえな、このオヤジ。

エンドウ、ジャックナイフでイトバシの腹を刺す。

同時にホワイトノイズとP音の合成音が鳴り響く。

イトバシ
……！

イトバシ、腹部から激しく出血し、のたうち回る。

ウサミ
先生！

ウサミ、自分に向けられたエンドウの殺意に気づき、パッセージAへ逃げる。

エンドウ
待て、こちら。

エンドウ、鼻歌を歌いながら、ウサミを追う。

オガワ、のたうち回るイトバシを呆然と見ている。

イトバシ、電話の置いてあった場所で絶命する。

パッセージAのドアの奥で、ウサミの悲鳴が上がる。

ホワイトノイズとP音の合成音が消えていく。

ウサミ、首を押さえ、後ろ向きにパッセージAから入ってくる。

振り向くと、顔面は血まみれ、首からは大量の出血をしている。

テレビの置いてあった場所まで歩き、そこで絶命する。

エンドウ、返り血を浴び、血まみれのナイフを持って戻ってくる。

イタバシとウサミの死を確認するように、それぞれに蹴りを入れる。
オガワ、呆然と立ち尽くしている。

エンドウ、ナイフを床に投げ捨て、プロローグにいた位置にすわり込む。

オガワ どうするんだよ？

エンドウ 何が？

オガワ 二人も殺しちゃってさ……

エンドウ 心配するな。オレがやったんだ、おまえじゃない。

オガワ でも……

エンドウ 大丈夫だよ、あとできれいに始末しとくから。

オガワ ……

エンドウ それより、そいつのポケット探って何かクスリくれよ。

オガワ きつと持ってないよ。

エンドウ そう思うか？

オガワ ああ……

エンドウ ほんとに？

オガワ じゃあ、自分で探せよ。オレはイヤだ……

エンドウ じゃあ、いいや。

オガワ ……

エンドウ まいったな。

オガワ オレの方がまいったよ……どうすればいいんだ、オレ？

エンドウ ……白黒のオオヤマネコがさ、木の上から何度も家畜の上に飛びかかって襲うんだよ。

オガワ え？

エンドウ でき、ついに農家のオヤジは村のモンみんな集めてさ、

木の上にいるオオヤマネコを殺すことにしたんだ。

オガワ 何の話だよ？

エンドウ 白黒のオオヤマネコの話だよ。で、オオヤマネコもいつまでも木の上にはいられねえからさ、

とうとうクソみてえな家畜の上に飛び降りてきたんだ。

オガワ ……

エンドウ そんなで、その白黒のオオヤマネコは、そこで撃たれて死んだんだ……

オガワ 何が言いたいんだ？

エンドウ でもな、村のヤツらも毛皮は救ってあげたんだよ。

その偉大な白黒のオオヤマネコの毛皮をはいで、その美しい毛皮を保存したんだ。

後の世の人たちがそれを見て、そのオオヤマネコがどんなだったか、

その力や大きさに感心することができるようにな。

そんなで、未来の人たちはそのオオヤマネコについて語り、

そいつの勇敢さと偉大さについてたくさん物語り、そいつの死に涙を流したんだよ。

オガワ ……

エンドウ そうしなければならなかったんだな……ああいうオオヤマネコには、

そうしてやらなきゃならないんだな。

オガワ こいつらは、そのオオヤマネコだつていうのか？

エンドウ 冗談じゃねえ！こいつらはオオヤマネコなんかじゃねえよ、クソみてえな家畜だ！

オガワ ……

エンドウ ……オオヤマネコはオレだよ。

オガワ ……！

エンドウ どうすればいいかわかるな？

オガワ え？

エンドウ おまえは頭がいいんだ。どうすればいいか、オレがどうしてもほしいかわかるよな。

オガワ、銃を握りしめる。

エンドウ そうだ。やっぱりおまえは頭がいいな。(正座にすわり直す)

オガワ ……

エンドウ いいか、ここ(眉間)を狙え。わかるな。

オガワ ……

エンドウ 早くしろよ。

オガワ、銃口をエンドウに向ける。

エンドウ そうだ、それでいい。外すなよ。間違いなく脳ミソにぶち込んでくれ。

強烈なのを脳ミソにぶち込みたいんだよ。

オガワ ……

エンドウ どうした？

オガワ ……

エンドウ どうしたんだ？

オガワ できないよ！

エンドウ おまえならできる。

オガワ できないって、オレはあんたとは違うんだ。

エンドウ ああ、そうさ、オレとおまえは別の人間だ。でもおまえならできる。オレにはわかるんだ。

オガワ どうして？

エンドウ そいつは説明しにくいんだよ、オレ、頭悪いからな。

ま、つまり、オレの左手は無限に引っ張られて逆さに戻ってきたおまえの右手ってことだ。

オガワ ……

エンドウ おまえはやるさ。

オガワ ……でも、どうすれば……

エンドウ 簡単なことさ、その瞬間、憎めばいいんだ。憎めば到達できる。

脳の中に小さな引き金がいっぱいあってさ、それを片っ端から引いちまえばいい。

オガワ ……

エンドウ とにかく憎め。
オガワ オオヤマネコのことをか？
エンドウ そうだな、それでもいいさ。
オガワ でも、わかんないよ、憎むったって、誰を憎めばいいんだ？
エンドウ ……誰を愛してる？

音楽。「TOM TRAUBERT'S BLUES」／TOM WAITS)

オガワ、再びエンドウの眉間に銃口を向ける。

エンドウ 撃て！

オガワ、引き金を引く。

銃声。

エンドウ、ぶっ倒れる。

オガワ、しばらくエンドウを見つめ、そして、エンドウの体に覆い被さっていく。
暗転。

エピローグ

暗転、音楽の中、オガワの留守電のメッセージが流れる。

オガワ

(録音) はい、オガワです。ただいま留守にしております。

ご用の方は、発信音のあとにメッセージをお入れください。

発信音。

照明がつく。

アマリが立っている。

壊れたテレビ、壊れた電話。

そして、アマリの足下には、オガワがうつぶせに倒れている。

舞台面が鏡のように光っている。

メッセージは何も録音されることなく、電話は切れる。

アマリ、オガワのポケットなどを探り、財布を取りだし中身を確かめる。
役に立たない会員証やレシートの類と小銭しかない。

アマリ、財布を投げ捨てる。

それから、白い錠剤を手に取り、一粒ずつ、オガワの上に落としていく。

暗転。